

日本ジオパーク申請地域

現地審査報告書

1. 茨城県北
2. 男鹿半島・大潟
3. 下仁田
4. 秩父
5. 白山手取川
6. 磐梯山

茨城県北地域 現地審査報告書

小泉武栄・高木秀雄，廣瀬 亘(事務局)

期間：平成 23 年 8 月 22～23 日

主な参加者（所属）

天野和男，皆川善廣，細井淳，滝本春南（茨城大学）・池田幸雄（茨城大学学長）・川上博行（グリーンふるさと振興機構）・荒川和子，西原昇治，鹿田次人，塙勝利，鈴木智信，沼田章，阿久津政光，永瀬瑞雄（県北 GP 構想インタープリタ），村田和華子（五浦観光ホテル），田切美智雄（日立市郷土博物館），草間吉夫（高萩市長）・小泉元伸（茨城県企画部 県北振興室長），鈴木祐輔（北茨城市市長公室副参事兼課長）

見学地点

平磯海岸，東海村，日立市かみね公園，旧日立鉱山，五浦海岸，高萩市歴史民俗資料館，花貫溪谷，棚倉断層，袋田の滝

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

日本最古の地質体であるカンブリア紀の地層・花こう岩，ジュラ紀～白亜紀のタービダイト，日本海形成期の堆積物，棚倉断層の地形地質など，パリエーションに富み観察条件も良好な観察地点群からなるジオサイトが 13 設定されている。ジオサイトには全国的に知名度のある観光地である袋田の滝、平磯海岸、五浦海岸なども含まれており、旧来の名所観光型旅行者に対してジオパークの名前を刻み込み、ジオを知ることの大切さ・面白さを知ってもらおうという面で重要な意味を持つ。日立鉱山など鉱業関係の産業遺構は日本ジオパークでは珍しく、すでにジオツアーも実施されており審査地域の特色となっている。また、地形地質条件を活かした農作物、芸術家と地形地質景観など、土地の人々と地形地質との繋がりに関するジオストーリーを組むこともできる。一方、海成・河成段丘や花こう岩地形など地形学系、氷期レリックや湧水など特殊な条件で維持される動物系など、地質以外の分野は一部を除きジオサイト整備が遅れ気味である。

各サイトについては、最新の研究成果までがフォローされよく練られたストーリーが組まれている。複数のジオサイトを連携させた魅力的なストーリー作りはまだ工夫の余地があり今後の課題である。また、何が見えるか、どのように見るか、それがどんな事件や現象を示すか、というストーリーが曖昧なジオサイトがあり、改善の余地がある。

コアセンター候補としては大学施設・自治体博物館が、サテライト候補としては公共交通機関の駅やホール・道の駅がある。宇宙科学教育研究センターや五浦美術文化研究所など大学施設については今年度中に情報センター・ガイド拠点として整備を進める計画で、協議会主催ジオツアーでも使用されているが、他の施設は事務調整に着手したという段階にあり本格的な稼働には至っていない。比較的よく整備された Web ページがそれに代わる役目を果たしているが、現地では各ジオサイトに行かなければなにも情報が得られないということがないよう、急ぎ整備を図る必要がある。ジオパーク構想のポスターは商店街・主要 JR 駅などに掲示されている。

説明板は主要なジオサイトについては整備が完了し、残りのサイトも今年度以降速やかに整備される予定である。ジオパークの看板であることが明確で、統一的かつわかりやすいデザインに

工夫されている，地元私鉄を用いたジオ鉄の試みはすでに私鉄会社の支援を取り付けており，沿線ジオサイトの整備が進めば有効な売りとなる。

多くのジオサイトは県立自然公園の中に設定され公的に保護されている。化石や鉱物採取などについて資源保全とバランスをとった活用が図れるような仕組み作りが必要である。

2) 教育・研究活動

茨城大学により地形地質およびジオパークに関する研究活動が行われ，各ジオサイトの案内パンフレットが整備されている。大学のバックアップのもと地元民をジオガイド(インタープリタ)として養成する講座，インタープリタが対象のブラッシュアップ講座が継続的に開催され，現在は36名がインタープリタとなっている。去年～今年からは多くのジオツアーがインタープリタにより説明され，ガイドの質・量とも向上しつつある。地元小学生などに向けた体験講座にも積極的に関与している。ガイド団体はいくつかの地域で活動が始まっている。自主的な研究活動に着手しているインタープリタも居り，今後はガイドグループの核となることが期待される。

3) 管理組織・運営体制

茨城県北ジオパーク構想のもと，地元7市町村と茨城大学，地元振興団体が推進協議会を構成している。現段階では茨城大学が事務局機能を担い予算の大半を担保しているが，今年から市町村の出資比率が大きくなりつつある。日立市も協議会参加のための事務手続きの段階に入っており，茨城県庁も含め茨城県北地域を構成する自治体のジオパーク運営への関与は今後ますます大きくなると予想される。事務局機能も協議会に参加する団体(グリーンふるさと振興機構)への移行が計画されており，大学・自治体・地元団体による管理運営体制の分担へ準備が進みつつある。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

ジオツアーは現時点では茨城大学または協議会事務局主催であり，個々に来る見学者向けの随時ツアーはまだ実現していない。コアセンター・サテライトの整備とガイドの連携により，対応体制を急ぎ構築する必要がある。年間数十万人にのぼる観光客が来るジオサイトもあり，魅力的なジオガイドツアーの設定により，地域振興への貢献だけでなくプロガイドの養成に繋げることもできるだろう。ジオに関連づけた特産品として，干し芋がすでに確立されているが，段丘上の米等農産物や窯業をジオと結びつけるなど，開発の余地は多い。

5) 国際対応

外国人向けジオツアーが試験的に実施され，通訳・文化の違いなど各要素の検証がなされている。今後外国人客が増加した場合にそれが活かされれば，宿泊施設の高いホスピタリティもあり満足度の高いジオツアーを提供できるだろう。外国語対応は英語が中心であり，各ジオサイトの説明板でも日本語・英語が併記されている。ガイドの外国語対応や中国語・韓国語などアジア圏向けの対応は，留学生の協力により取り組みが進められる予定である。

6) 防災・安全

袋田の滝など急傾斜地では落石防止対策が取られているが，海岸部や溪流部は個人の判断に任されている。ジオサイトを結ぶ道路網では自動車通行について道幅がかなり狭い箇所があるが，改修工事が進められている。3.11の津波や強震動による液状化・広域的な地盤沈下などの被害は大きかったが，津波高がわかるような表示，被害箇所の一部保存などをはかりジオツアーに組み込むことで，被害実体験者による防災教育のフィールドとなし得る。

男鹿半島・大潟 現地審査報告書

伊藤和明・中田節也，竹之内耕（事務局）

期間：平成 23 年 8 月 11～12 日

主な参加者（所属）

渡部幸男（男鹿市長）・高橋浩人（大潟村長）・杉本俊比古（男鹿市教育委員会教育長），高橋一郎（大潟村教育委員会教育長），白石建雄（NPO 法人あきた地域資源ネットワーク理事長）・三浦綾子（社団法人男鹿市観光協会）・夏井興一（男鹿の自然と文化の会代表），菅原繁喜（加茂青砂地区会長）・土井敏秀（はなさか爺さんプロジェクト GAO 事務局）・鈴木雅彦（男鹿脇本第一小学校校長）・越後城司（株式会社ルーラル大潟総料理長）・樋熊正夫（大潟村案内ボランティアの会会長）・竹内弘和（男鹿市教育委員会生涯学習課）・薄井伯征（大潟村干拓博物館学芸員）ほか

見学地点

男鹿半島海岸部，男鹿総合観光案内所，安田海岸，八望台，寒風山，大潟干拓博物館，干拓記念碑，緯度経度交会点，大潟富士など

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

日本海拡大前（5000 万年前以降）の地層から第四紀の火山まで、地質や古環境の変化がほぼ連続的に観察できる地域である。造構的に変動の激しい場所にあたり、地震毎に繰り返される隆起運動の証拠が地層、地形、化石などに残されており、最近の地震による津波災害を示す記録もある。一方、沈降が激しい八郎潟には広大な干拓地が作られ、新しい生態系が形成され、自然教育の場になっている。このようなジオと生物・人々の関わりを学べるサイトが多数あるのが特徴である。本地域はグリーンタフ名称の発祥の地であり、その模式地である男鹿半島は国定公園に、いくつかのジオサイトは文化財に指定され、保護されている。また、干拓地は渡り鳥の絶好の生息地となっており、大潟村は、EAAF（東アジア・オーストラリア地域フライウェイ）パートナーシップに加わるなど、渡り鳥の保全・保護の活動を行っている。しかし、男鹿半島でのこれまでの取り組みは、地形や地質の紹介が大部分であった。生物・歴史・文化などのジオに関連する優れた素材が多数あるので、これらを取り込んだストーリーの構築と案内が必要である。一方、大潟では男鹿半島の地質・地形発達を絡めた解説を工夫すべきである。ジオパークの解説板はまだ未整備であるので、新たな解説板の設置や既設解説板のリニューアルが望まれる。

2) 教育・研究活動

地質に関しては、さまざまな大学や研究機関により、古くから研究が行われている。これらの研究成果をまとめた「男鹿半島ジオサイト観察手引書」が出版され、ガイドや教員に活用されている。地元の小学校、中学校では、ジオサイトを利用した学習活動が行われている。また、男鹿市の加茂青砂地区では、廃校を利用した生涯学習活動が始まり、ジオパーク活動として位置付けられていくことが期待される。さらに、ここは、津波犠牲者の慰霊碑や地震塚が存在するので、津波に関する解説板を設置し、防災教育に役立てていく必

要がある。ビジターセンター、計画中の資料館および干拓博物館を利用した教育活動が期待される。観光客むけの男鹿半島ジオサイトマップ、ジオスポットマップがあるが、今後、大潟村を含む印刷物が望まれる。

3) 管理組織・運営体制

男鹿市と大潟村で、それぞれジオパーク事務局がある。現在、男鹿市では教育委員会生涯学習課に置かれている。日本ジオパーク認定後の事務局組織の拡充は今のところ未定である。大潟村では、博物館学芸員1名が担当しているが、村職員に学芸員資格をとってもらうなど複数体制をめざす計画がある。特に、例えば、計画中の資料館を拠点とし、ガイド養成、観光誘致、宣伝などについて、協議会構成員の役割分担と進行状況を事務局がきちんと把握できるように、男鹿市と大潟村が一体化した運営体制の確立が必要である。また、あきた地域資源ネットワークが現在ホームページを管理しているが、事務局が中心になって管理するのが好ましい。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

男鹿市には3つの観光ガイド団体が、大潟村では案内ボランティアの会がそれぞれ活動している。ジオパークガイドの養成講座が行われているが、協議会と事務局がガイドの品質管理もできるガイド養成体制が急がれる。男鹿市と大潟村とも、地元の素材を使ったジオパーク料理の開発を行っており、一部は商品化されている。大潟村では農業体験活動が行われており、ジオパーク活動と位置づければさらなる発展が期待される。先述したように廃校を利用した地域活動が始まったが、こうした活動が各地区へ広がり、ツーリズムと連携がとられて地域振興につながっていくことが期待される。このように、ジオパーク活動の端緒が認められるものの、ジオパークの地域住民へのさらなる浸透が必要である。ジオサイトは国定公園内や国の干拓施設（秋田県管理）にあるので、国や県と連携し案内板や解説板を設置し、来訪者がスムーズに入場や移動ができるようにする必要がある。また、自動車での来訪者がジオサイトを巡れるよう誘導標識を整備していく必要がある。

5) 国際対応

ジオパーク仕様の解説板には、表題部のみ英語と韓国語が併記されているが、テキスト部では外国語対応がなされていない。また、ガイドブック、マップなども同様である。今後、外国語対応が急務である。

6) 防災・安全

男鹿市独自に、地震のハザードマップの見直しを秋田大学の協力をえて進めている。津波の慰霊碑、地震塚など災害モニュメントもある。しかし、地震空白域に面していながら、沿岸部の見学地に津波警戒の告示板がなく、解説板やパンフレットを含めて設置が急がれる。第四紀火山があり、火山防災の学習が可能である。

下仁田ジオパーク現地審査報告書

中川和之, 小泉武栄, 松原典孝(事務局)

期間：平成 23 年 7 月 27～28 日

主な参加者（所属）

金井康行（ジオパーク下仁田協議会長・下仁田町町長），高木成雄（下仁田町教育長），神戸良治（下仁田町教育委員会ジオパーク推進室長），大河原順次郎（下仁田町教育委員会ジオパーク推進室登録推進係 係長），関谷友彦（下仁田町教育委員会ジオパーク推進室登録推進係 主事），堀越武男（下仁田自然学校※元理科教員），桜井冽（下仁田自然学校），飯島富司（下仁田自然学校※下仁田町民），飯嶋常男（中之嶽山岳会）齋藤将広（中之嶽山岳会），原田喬（中小坂鉄山研究会※産業考古学会理事），岩井実（中小坂鉄山研究会），石井とし子（中小坂鉄山研究会），秋池武（ふるさとセンター所長），高桑祐二（群馬県立自然史博物館）

見学地点

道の駅しもにた，ジオサイト「青岩公園」，ジオサイト「クリッペのすべり面」「フェンスター」，ジオサイト「宮室の逆転層」，下仁田町自然史館，妙義山，中小坂鉄山，ふるさとセンターほか

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

跡倉のクリッペや中央構造線をはじめとして，日本列島の形成にかかわるダイナミックな大地の変動を間近で観察できるサイトが多数ある。また，古代～現在まで人々の生活の拠点となった鐮川沿いの段丘や，信仰の対象のみならず江戸時代から「登山」客が集った妙義山，日本では珍しい鉄鉱石鉱山，日本の富国強兵を支えた国指定史跡荒船風穴など，大地と人々のつながりを直接感じられるサイトが数多くあることが特徴的である。さらに，クリッペは根なし山として地域の多くの人の常識になっているなど，地域住民の大地の成り立ちへの理解度が高いことも興味深い。ジオサイトの案内看板は既存のものがあるものの記述が古いうえに難解であるが，近年中に修正予定である。中央構造線やクリッペなど，説明が困難なテーマが主な見どころであるため，一般への理解にはかなりの工夫が必要となる。現在，個々のサイトの説明については各ガイドが工夫し，わかりやすい解説を実現している。現在，各ジオサイトの地史の中での位置づけは十分とは言えず，日本列島形成を含めた広域的な地史の中へ位置づけされた下仁田ジオパークのストーリー作りが必要である。今後，地域住民の地域への理解が深いことを活かし，地域住民が参加した形でのジオストーリー作りが期待される。

主なジオサイトは河川沿いにあり，河川法で保護されているほか，地域住民により県指定文化財等に指定されるよう運動を行っている。いくつかのサイトは史跡や国定公園に指定され保護されている。鉄山などはガイドなしの入山を極力制限するなど，保全とともに安全への配慮がされている。

2) 教育・研究活動

教育活動としては，町の出前講座やジオツアー，子どもの体験教室などを積極的におこなっており，子供を含めた参加人数は述べ 2000 人を超える。廃校を利用した下仁田町自然史館（協

議会事務局および下仁田自然学校がある)は広く、展示室のほか収蔵室などがあり、今後石工室を整備する予定であるなど、教育のみならず研究活動の拠点としても有用である。ここには下仁田及びその周辺の主な文献が集約されている。下仁田自然学校では機関紙「くりっぺ」をはじめとして「かぶら川の石図鑑」や下仁田の植物や昆虫等について記載した下仁田自然学校文庫シリーズを発行するなど、教育活動に力を入れている。

研究活動については、下仁田自然学校をはじめ、「関東山地団体研究会」「関東火山灰グループ」「金剛萱遺跡研究会」「本宿陥没研究会」「下仁田町化石探検隊」、「妙義団体研究グループ」「鉄山研究会」「歴史研究会」等が研究活動を行っており、ほかに群馬県立自然史博物館が研究を行うと同時に全面的なバックアップを行っている。大学としては主に早稲田大学(高木研究室)が研究活動を行うと同時に下仁田ジオパークの学術面をサポートしている。協議会事務局には地質学を専攻した常勤職員(関谷氏)があり、ジオパークの運営に携わるとともに地質遺産とそれを利用する人々についての研究や地質学的な研究を行っている。

3) 管理組織・運営体制

下仁田町を中心に下仁田町及び周辺の各団体、市民団体等が連携して活動を行っている。協議会には群馬県立自然史博物館も入っており、学術及びアウトリーチ等の面で全面的にバックアップしている。さらに、群馬県も全面的にバックアップしており、ジオサイトの整備やマップの作成等で金銭的援助もしている。ガイドを行う団体は下仁田自然学校を始め複数あり、ジオパーク下仁田協議会の元、活動を行っている。ガイドの手配も推進協議会で集約して行っている。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

ガイドの解説はそれぞれのガイドにより工夫されておりわかりやすく親しみやすい。ガイド団体は地域住民で構成され、特に下仁田自然学校のメンバーは、ジオパークでの活動を通じて地域の活性化につなげたいと、積極的に活動を行っている。一般住民へのジオパークへの理解度も高く、地域が一丸となったジオパーク活動が期待できる。町としてもジオパーク活動を主な地域づくり活動として推進している。特に、下仁田ネギとコンニャクはそのまま大地の恩恵を受けた特産物であり、ジオパーク活動の中にそれら特産品のブランド力アップも盛り込んでいる。ガイドの体制については、有料のものと無料のものがあり、現在は統一されてはいない。ガイド団体の量及び質、管理運営体制が良好なので、今後看板の整備やわかりやすいジオストーリーの確立がなされれば、ジオツーリズムの舞台として発展するものと期待できる。

5) 国際対応

現在整備中である。拠点施設の案内パネルや動画など、二か国語(日本語・英語)対応したものを今年度設置予定である。パンフレット、ジオサイトの看板など、今後多言語化対応することによって、ガイドの解説も含め、これからの整備課題である。

6) 防災・安全

現在、防災教育に関するプログラムは特に行っていないが今後地すべり地域等で防災教育にも取り組んで行く予定とのこと。今後の展開が望まれる。地域全体の防災対策としては町として行っており、協議会が特別に行っていることはない。ツアーでの安全対策については、危険個所ではヘルメットを装着させており、また、一部の鉱山などでは、ガイドがいないときは立ち入りを制限する、ガイドがいても入ってはいけないところを設定する等の対策を行っている(危険な坑道は柵等で立ち入り制限されている)。ほかに、露頭に上るときやハンマー使用時の注意等を行っている。

秩父 現地審査報告書

尾池和夫・菊地俊夫, 下川浩一(事務局)

期間：平成 23 年 8 月 2 日(火)～3 日(水)

主な参加者(所属)

横井隆幸・前■(「堅」の「臣」の部分が「田」、まえの)進一・松崎重男・浅見 弘・新井秀弘・宮城 敏・新井康代(秩父市), 吉田健一(秩父まるごとジオパーク推進員), 小幡喜一(NPO 秩父まるごと博物館), 山口・木村(NPO ちちぶまちづくり工房), 斉藤(秩父学セミナー受講者), 萩原(NPO 秩父の環境を考える会), 小池(和銅保勝会会長), 新井直行(秩父神社), 福島弘文(小鹿野町長), 新井祐一(長瀬町教育長), 石木戸道也(皆野町長), 本間岳史(埼玉県立自然の博物館), 岩崎 宏(埼玉県議会議員), 新井竹男(小鹿野町副町長)

見学地点

聖神社と宝物館, 札所 4 番金昌寺, 札所 19 番龍石寺, 河岸段丘の町歩き(秩父神社～武甲酒造), 美の山, 長瀬駅, 埼玉県立自然の博物館及び荒川河原, 特別天然記念物・紅レン石片岩, 太田条里・伊古田純道・逆転層, 取方の露頭, 小鹿野町立おがの化石館と「ようばけ」, 札所 28 番橋立堂

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

秩父地域では、秩父市と周辺町の行政、NPO 及び地域の研究者が団結した見事なチームワークをもって推進協議会の運営を進めている。2 年前に指摘された各市町の活動レベルの格差や連携の乏しさについては大幅に改善された。また、ジオと歴史のストーリー性についても、札所と地質との関連性がクローズアップされ、桑畑の発達と秩父銘仙産業の繁栄に見られるような地形と水利用に係る土地利用や産業遺跡との関連性について言及するなど、「秩父まるごとジオパーク」のキャッチフレーズに近づいたと評価できる。

また、いくつかのジオサイトでは、地域住民による保全管理や清掃活動が行われており、保全に対する積極的な姿勢が見られた。

他方、拠点が小鹿野町と長瀬町の 2ヶ所のみで、秩父市と他の町には整備されていないことや、秩父市の和銅宝物館の施設老朽化への対策など、今後のさらなる努力が求められる。また、「地質学発祥の地」としての説明が素人にはわかりにくいことなども改善の必要がある。

2) 教育・研究活動

「理科わくわく教室」として、小学生とその保護者を対象とした見学会、化石探し等のイベントを行ったり、県立自然の博物館による小・中学校への学習支援、及びNPO秩父まるごと博物館による荒川での学習会開催など、教育活動にも力を入れている。また、市民学芸員養成研修でのガイド養成やジオパーク活用講座等の市民講座、実地研修によるジオガイド養成、ジオサイト観察会やジオサイトバスツアー、バイクジオツアーの開催など、市民向けの教育活動も盛んに行わ

れている。さらに、地元研究者による自然銅生成メカニズム解明や脊椎動物化石研究、早稲田大学学生によるジオサイト選定など、研究の場としての活用も行われている。

3) 管理組織・運営体制

秩父市と横瀬町、皆野町、長瀬町、小鹿野町の1市4町で「ちちぶ定住自立圏形成協定」を締結し、その枠組みによる総務省補助金でジオパーク推進協議会を運営している。協議会は上記組織のほか、秩父地域内の教育委員会、観光協会、商工会議所、埼玉県立自然の博物館、埼玉県秩父地域振興センター、NPO 秩父まるごと博物館、NPO ちちぶまちづくり工房、NPO 森、NPO もりと水の源流文化塾、NPO 秩父の環境を考える会、秩父鉄道株式会社、西武鉄道株式会社など30団体で構成されている。協議会の役割分担は、行政機関がジオパークの整備・運営全般・広報・連絡調整・学術面の支援・ガイド養成等教育面の支援を行い、NPO 団体がジオサイト観察会・ジオガイド養成等の具体的な活動を分担し、その他の機関がジオツーリズム・秩父学検定、来訪者の受け入れ、ジオ商品の企画・開発、及び販路拡大を行っている。また、埼玉大学と秩父市は昨年10月に包括連携協定を締結し、学術的支援を受ける体制を整えている。このように、かなり整備された組織・体制が整備されており、今後の活動成果が期待される。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

今年度はジオガイド養成研修5回、ジオツアー5回開催の予定で、実績では毎回100名以上の参加者がある。日曜地学ハイキングはこれまで445回以上の開催実績があるとのことだが、未だ一般市民に浸透しているとは思えない。したがって、今後リピーターを増やしていくためにも、ガイド者自身が他のジオパークを訪問するなどにより、客観的に地域を見直すとともに、相手の立場に立った説明に心掛ける必要がある。また、外部の観光ガイドの方々にジオパーク活動を積極的に宣伝していく努力も必要である。

5) 国際対応

8ヶ所の総括看板や博物館の展示、案内版などは日本語表記のみであり、多言語化への対応は未整備である。

6) 防災・安全

一部のジオサイト（例えば紅レン石片岩露頭）では、階段や手すりが整備されているが、大部分では危険箇所の表示も整備されていない。なお、長瀬地域では、ライン下りやカヌーが盛んなこともあり、水難救助訓練が行われている。

白山手取川 現地審査報告書

鹿野久男・佃 栄吉, 濱崎聡志(事務局)

期間：平成 23 年 7 月 29～30 日

主な参加者（敬称略）

山口 隆・安田理恵・小阪 大(ジオパーク推進協議会事務局, 白山市教育委員会), 日比野剛(白峰化石調査センター), 作野広昭(同協議会長, 白山市長), 喜田紘雄(同市教育長), 登 敏明(副会長, 白山手取川漁協), 小澤 昇(副会長, 同市公民館連合会), 永井隆一(白山観光協会), 藤田重敬(国交省金沢河川国道事務所), 瀬川 涼(環境省白山自然保護官), 金津五雄(石川県自然解説員研究会), 村西博二(同市ボランティアガイド協議会), 三谷幹雄(NPO ネイチャープロジェクト), 山口一男(NPO 白山麓地域文化振興協議会), 山口拓哉(NPO 白山しらみね自然学校), 磯部雄三・辻 貴弘(NPO 加賀白山ようござった会), 藤木克彦(美川自然人クラブ), 長谷川卓・青木賢人・平松良浩(金沢大学) 他多数

見学地点

白山中飯場(白山登山道、砂防現場), 白山砂防科学館, 百万貫岩, 桑島化石壁, 白峰化石調査センター, 白峰村街並, 手取川ダム, 鳥越城跡, 道の駅しらやまさん, セケ用水大門, 鶴来街並, 獅子吼高原, 白山比咩神社, 松任街並, 美川伏流水群(トミヨ増殖池, お台場の水), 小舞子海岸, ルーツ交流館

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

- ・ ストーリー：白山市の山側から手取川下流の扇状地に向かって全体を一つにむすびつけ、「水の旅」という非常に魅力的で既存のジオパークにはないユニークなテーマを設定している。水が生まれる山と雪, 水が育つ川と峡谷, 水が活かされる海と扇状地の3エリアに分け, 各々に4, 3, 4の11ジオサイトを設けている。ジオの資源が豊かであるものの, ジオパークとしては全体にもっとジオの要素, 特に地形の解説を加える必要がある。川と気候変動との関連, また, 白山に大量の水をもたらした要素(日本海, 対馬暖流, 大陸からの季節風, 高い山)の成立を時間軸で説明したもの, 特に子供たちが水の旅をもっと理解しやすいように図や絵があるとよい。さらに, 海を入れたストーリーを考えてほしい。
- ・ 解説板：ジオパークを伝えるための解説板の整備はこれからである。既存の看板を有効に利用しつつ, 全エリア, 全サイト, さらに必要なポイントに, 統一的な外観の最低2カ国語のものを3カ年で設置する計画である。桑島化石壁サイトは危険なため立ち入れない状態であり, 今後の整備が必要である。
- ・ 拠点施設：基本的に現在の市, 県, 国の公共施設を活用し, それらを順につなげていく形に整備する計画である。それらのとりまとめ拠点として, 国交省を通じて道の駅に協力を要請している。その他に白山国立公園自然保護センター各施設, 白山砂防科学館, 観光情報センター, ルーツ交流館など拠点となり得る施設がいくつかある。
- ・ ガイド：地元の自然や歴史文化に関する9つのボランティアガイド団体がある。ジオパークに大きな期待と関心を寄せており, 非常に協力的で, 行政との連携もよい。彼らは非常

に熱心で、特に県認定のスペシャルガイドは一般のガイドよりも専門的な知識を持ち、レベルも高い。ジオパークに向けては、現在のガイドに“ジオ味”をつけるためのジオガイド養成講座を開催し、説明内容やガイドの品質を保持するため、県内研究機関等の協力を得て標準となる教材を作成している。

・ その他：ジオパークのパンフレットは、先行地域に学びながら、11の各ジオサイトを解説したもの、水の旅のテーマ毎に解説したものなどいろいろな種類を作る計画である。将来的に個々の素材が集まった段階で、ジオパーク全体を説明する総合的なものを作成予定。

2) 教育・研究活動

「ジオ」を理解してもらうために、協議会事務局が出前講座の活動を行っている。白峰化石調査センターは、日本の古生物学発祥の地とされ手取層群からの恐竜化石発掘の先駆けともなった桑島化石壁から多くの研究成果を出すとともに、発掘調査へのボランティアを募り子供や一般への普及を行っている。また、白山手取川漁協は、子供たちに白山からの水の恵みを教えるため、今年で32回目となるあゆ稚魚の放流体験学習や、イワナの受精卵をふ化させ放流する活動などを実施している。金沢大学をはじめ県内の大学・研究機関も、ツアーコースの開拓や解説教材の作成等に協力している。

3) 管理組織・運営体制

ジオパーク推進協議会は2010年11月に発足し、白山市長を会長とする。事務局は同市教育委員会ジオパーク推進室に置かれ、専任3(含学芸員1)、併任4(同1)の7名の職員からなる。同協議会は商工・農林漁業、公民館、ガイド団体、大学・研究機関、市県国の行政機関など30団体から構成され、白山市からの補助金をもとに、独立した予算、財務管理を行っている。8月20日に同市主催のジオパーク構想シンポジウムが開催される。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

山側から海側へかけての28公民館が、ジオパークは生涯学習、地域活性化に関わりが強いという認識を持つ。各公民館の子供たちによる夏は山へ冬は海へという交流授業があり、現在5公民館でジオツアーも実施している。観光協会は、白山観光にジオを加えて強化したい意向を持つ。白山の源流水は古くから日本酒、味噌、醤油などに使用され、特に日本酒は世界的な評価を受けている。また、商品開発された白山堅豆腐カレーは中小企業庁長官賞、地方特産品第2位の栄誉を受けている。他にも商工会女性部による地下水を使用した甘酒入りのソフトクリームなどユニークな商品もある。

5) 国際対応

小松空港には韓国、中国便が就航しており、東アジアからの観光客を視野に入れたPR活動を行っている。その際、大陸との関係も加味した歴史・文化の説明が必要との認識を持つ。英語その他の外国語による解説板、パンフレット等の整備はこれからである。

6) 防災・安全

白山を源流とする非常に急峻な手取川は明治以降多くの大水害を引き起こし、白山砂防工事は1912年の開始から来年100年を迎える。昭和初期の砂防堰堤群は日本最古級の人力施工石積み堰堤として土木遺産にも認定されている。土砂災害の一般への啓発、普及のため、国交省白山砂防科学館が2001年に開館し、各種展示のほか白山監視カメラによるリアルタイム映像がネット配信されている。一方、白山火山の噴火リスクも考慮する必要があり、地質図を利用した噴火時のハザードマップ作成など、火山災害への備えも望まれる。

磐梯山 現地審査報告書

町田 洋・成田 賢, 大野 希一 (事務局)

日程：平成23年8月20～21日

主な参加者 (敬称略)

小椋 敏一 (磐梯山ジオパーク協議会会長・北塩原村長)、前後 公 (協議会副会長・猪苗代町長)、五十嵐 源市 (協議会副会長・磐梯町長)、竹谷 陽二郎 (協議会運営部会長・福島県立博物館)、佐藤 公 (磐梯噴火記念館副館長)、田島 一博 (いなわしろ伝保人会)、白岩 賢一郎 (磐梯山慧日寺資料館)、佐藤英一 (NPO 法人 磐梯やま楽学校)、小檜山 六郎 (野口英世記念館)、荒井 勇 (裏磐梯エコガイドの会)、伊藤 延廣 (裏磐梯エコツーリズム協会)、蟹巻 良 (北塩原村商工観光課長・磐梯山ジオパーク協議会事務局長)、佐藤 康一 (磐梯山ジオパーク協議会事務局)、蓮池 真 (磐梯山ジオパーク協議会事務局)、物永 裕司 (磐梯山ジオパーク協議会事務局)

見学地点

天鏡台, 猪苗代リゾートスキー場, 磐梯山慧日寺資料館, 磐梯山慧日寺金堂・中門、JR 磐梯駅近く翁島岩なだれ露頭、野口英世記念館、土津神社、見祢の大石、磐梯国際スキー場、渋谷集落、長沢・殉難之精霊碑、長瀬川川上温泉-秋元湖 東照橋上、旧桧原本村 崇徳寺、大山祇神社、桧原歴史資料館、弥六沼、磐梯山噴火記念館、裏磐梯ビジターセンター、五色沼・毘沙門池、裏磐梯サイトステーション

現地審査のまとめ

磐梯国立公園に指定されているエリアは、1888 年の水蒸気爆発によって生じた磐梯火山の崩壊地形や、岩なだれの堰止めによって生じた美しい湖沼群、そして荒廃した大地から復活した貴重な植生が保護されている。この地域には多数の遊歩道が整備されているほか、大駐車場を兼ね備えたビジターセンターや、磐梯山噴火記念館といった施設が豊富で、観光客が磐梯火山周辺の自然環境や地形地質に関する情報を手軽に入手し、楽しむための仕組みが整っている。また、会津仏教文化の礎となった寺 (慧日寺) や、桧原湖に水没した旧桧原本村の神社 (大山祇神社) に代表される豊富な歴史遺産や、野口英世記念館のような集客力のある施設も存在するため、高いポテンシャルを有する観光地の中に、様々な視点から人とジオとの関わりを知ることができる素材が随所に存在している。その一方で、既存施設が多数存在するため、ジオパークとしての明確な中核施設が設定されていないことや、歴史遺産が有する価値とジオとをつなぐストーリーが不足している点が課題である。ジオパークとしての中・長期計画の策定を進めながら施設間の連携を強化するとともに、歴史遺産や「山塩」など地域の食文化とジオとを絡めたストーリーが構築されれば、豊富なジオ資源を存分に活用することができるものと期待できる。

1) ジオサイトと保全

磐梯国立公園の区域内に存在するジオサイトは、法的な保全がなされている。また、国立公園の区域外にあるジオサイトのいくつか (例えば見祢の大石など) は、国の史跡に指定されているほか、地域住民の手によって保全されているジオサイトもある。ジオサイトの

解説板は現在6基あり、毎年5基程度を設置する計画があるが、既存の解説板は盤面が小さく、説明文が長くて記述も細かい。また、天鏡台や大山祇神社といった重要なジオサイトには、早急に解説板を設置する必要がある。

2) 教育・研究活動

教育活動としては、磐梯山噴火記念館と裏磐梯中学校が連携し、2001年から火山を中心とする防災教育が続けられている。既存の活動に加えて、平成23年8月には「第12回 地震火山子どもサマースクール」や、国立磐梯青少年交流の家主催の「われら地球人 磐梯ジオキャンプ」も開催され、ジオパークを活用した教育事業が徐々に地元に広がりを見せ始めている。また、研究活動としては、福島県立博物館の竹谷陽二郎氏と磐梯山噴火記念館の佐藤 公氏を中心に、主に磐梯山1888年噴火の地形変化や災害に関する研究が行われ、ジオパークとしての品質が保たれている。2008年には、福島県立博物館、磐梯山噴火記念館、野口英世記念館の3つの施設で、磐梯山をテーマとした共同企画展が実施された。磐梯山ビジターセンターでは、磐梯山周辺の植生変遷や観光動向に関する調査研究を行った大学の卒論生を集めて、毎年卒論発表会を実施し、地域住民に研究成果の共有を図っている。卒論発表会の発表者には交通費の一部を支給するなどの制度もあり、持続可能な方法で、多面的な視野から該当地域を研究する体制がとられている。

3) 管理組織・運営体制

磐梯山ジオパーク協議会は、北塩原村長を会長、猪苗代町長、磐梯町長を副会長とし、行政関係者、研究者、商工会、博物館等施設の関係者、商工関係者、ガイド団体で構成されている。協議会の中にある3つの部会の活動は「運営部会」に集約され、ジオパーク協議会事務局と連携しながら、それぞれの活動状況が共有されている。協議会事務局は、北塩原村商工観光課長を事務局長に、2町1村の職員4名で構成されているが、日本ジオパークの認定後は、ジオパーク専任のスタッフを置くなど、さらに拡充する計画がある。今後は、協議会に属する民間団体が積極的にジオパークの事業に参画し、官民一体となってジオパークの事業を推進していくような体制づくりが求められる。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

環境省裏磐梯自然保護官事務所が組織した「パークボランティア」は、1990年から五色沼周辺域の自然観察会を行っている。10年ほど前からは、いなわしろ伝保人会や、裏磐梯エコツーリズム協会に代表される大小様々なガイド団体が、「ジオツアー」に相当する自然観察会や体験型プログラムの実施を継続している。特に、裏磐梯と表磐梯にまたがる広い範囲のガイドを希望される観光客に対しては、ガイド団体間で情報を共有し、エリアごとにガイドを斡旋するスムーズな顧客対応を実現している。現在実施しているジオパークのガイドの養成は、これらガイド団体によって企画・運営されており、養成されたジオガイドは既存の団体に所属し、有料ガイドとして活動する予定である。

5) 国際対応

外国人観光客がほとんど来訪しないこの地域は、外国語のパンフレットやマップがほとんどない。将来的に世界ジオパークの認定を目指すのであれば、外国語版のマテリアルの整備を進めるとともに、外国語で説明ができるジオパークガイドの育成も推進すべきである。

6) 防災・安全

磐梯山噴火記念館に展示されている磐梯火山のハザードマップは、噴火レベルが反映され

ていない古いものであり、改善が必要である。また、観光案内板や宿泊施設の中にも、磐梯山が活火山であることを示すアナウンスはない。観光客に火山噴火のリスクをどのように伝えていくかは今後の課題である。崩壊地形の中にあるジオサイトや、容易にJR の線路内に侵入できるジオサイトについては、厳しい安全管理が必要とされる。